

高貴

樹木は言葉を有し、深い真言を語る。岩は常に考え、哲学している。海の恩料はあまりにも偉大だ。蒼穹は高貴なる精神で私たち人間を見下ろす。

人間の思惟など思惟ではない、ただインパルスがネットワークを駆け廻り、ドーパミンなどの脳神経伝達物質を分泌させているだけだ。それが気分（怒りや哀しみ、理解や納得、好きや嫌い、認知や記憶、希望や絶望）という建物を造って現象を生ぜしめているだけだ。

耳の小さい、高貴なる人間に対し、揺るぎない安定と、もはや私たちには戻ることができない場所への郷愁を私は感じる。そしてもはや帰れないとは言え、時に想起することがまったくの無為ではないと考えるものである。

「敵の数は凡そ二十万です」
おおよ

私はそう言っていると、もう一度、高貴なる百戦錬磨の戦士の顔を見詰め返した。老髭の彼の表情に変化はない。やむなく言葉を続けた。

「自走式野戦砲や自動装填連射銃やバズーカ砲など、恐るべき大量殺戮兵器を持っています。

それに比べ、我々は数百に過ぎません。叡智を振り絞り、戦術を駆使しなければなりません。

いや、はっきり言えば、少しでも時間稼ぎをし、城壁内の女や年寄りや子どもたちを、少しでも遠くへと逃がさなければなりません」

だが老兵^{ふるつもの}は決然と言い放つ、

「正々堂々騎士道精神にのっとり、一騎打ちを挑む」

私の体に憤りが込み上げる。

「何ということをするのですか。帝国は分厚い鋼鉄で装甲された上に大砲を装備した自走式戦車数千台で襲撃して来るのです。騎馬で正面から立ち向かうなど狂気の沙汰です。

狭い場所に誘い込みましょう。大軍と戦うときの定石ですよ。

敵はここに地理に詳しくないので。なぜなら調査に費やす時間が今回はなかったからです」

汚れた地図の地点を指で荒々しく示す。だが彼は深く落ち着いていた。

「それは卑怯ではないか。計略を使うなど、卑劣ではないのか。

我々は飽くまで戦士らしく潔く、正面から戦う。先祖から継いだ栄誉ある名を高らかに言挙げしてな」

「狂気の沙汰です」

「君は我々に帝国シルヴィエのように闘えと言うのか。君が言うのは、祖国の伝統と精神を捨てて、商人が利を貪るように、見境もなく勝つことを欲望し、奪う虎狼の国家を真似せよということだ。

はつきり言おう。

狂っているのは君らの世界だ。君らの世界では勇氣も誇りも潔白も要らないのだろう。我々は獣^{けだもの}ではない。神から知性を与えられた人間だ」

「なるほど、あなたたち戦士はそれで満足かもしれない。

しかし女や老人たち、何も知らない幼い子どもたちは、どうなるのですか。虐殺されてしまうし、たとえ逃げ果^{おお}せたとしても、飢えて凍えてさまようのです。衣食住もなく」

「やむをえまい。

人として誇りを喪うよりはましだろう」

「そんなばかな。ありえない。幼い子どもたちですよっ」

「幼子もいつか大人になる。生きておればな。そのとき自らが命を失いたくないがために不正を行って生き延びた者だったと知れば悔いて父祖を恨むであろう」

「話にならない！」

「君が我々を心配してくれることには感謝する。

しかし君の勧めは商いの生き方だ。我々はそのような利に敏^{さと}い生き方を屈辱的であると感じる。

時に滅ぶのは定めなのだ。かつて我が国と戦って滅びた誉れ高いクシャーラ国には偉大なる勇者が数多いた。彼らは我らの非情の剣に依いてことごとく斬られ斃れている。

我々は彼らを尊敬していたが一切の憐憫はしなかった。即ち『神は我が胸に過酷なる心を置きたまえり』と。我が部族は古来この言葉に従って生きてきたのである。

軍が列して歩めば、戦士の足に踏まれて無為に折られる草花がある。何故に我らの命が非道理不尽に断たれることを歎くものか。

我が高潔の魂はそうに考えることを清いと思う」